

横井小楠における「三代」理念の展開

北野雄士

Yokoi Shōnan's Development and Reformulation of the Idea of *Sandai* ("Three Dynasties")

KITANO Yuji

Abstract

A core concern in the political thought of Yokoi Shōnan (1809-1869), Confucian scholar and samurai from the Higo (Kumamoto) Domain, was the idea of *Sandai* ("Three Dynasties"). This idea, however, shows a change in his thinking in the first half of his forties. This paper attempts to examine the continuities and discontinuities within this idea, between his thought in his thirties and that of his forties and fifties.

In his thirties, he followed the example found in the thinking of orthodox Confucian scholars and idealized the politics of the three dynasties, the Hsia, the Yin, and the Chou in ancient China, as the standard for good government. In this earlier period of his intellectual thought, this idea meant that benevolent rule by political leaders should be practiced with a self-discipline in everyday life. He tried to realize this in the Higo Domain and proposed economic and agriculture-based policies to control demand and prices.

The moment for the reformulation of his ideas was when he started communicating with samurai retainers of Echizen (Fukui) Domain and an intensive reading of *Kaikoku zushi* (An illustrated gazetteer of the maritime nations), a Chinese geography of the world compiled in 1842.

Starting in the first half of his forties, he goes further back to the ages of Yao and Shun, the legendary emperors before the three dynasties, adding political principles of their behavior to his idea of "Three Dynasties".

With this new development of his idea, he advocated open and friendly discussions between lords and their vassals, and based on this proposed political reforms in Echizen Domain and Tokugawa Shogunate.

His reforms embodied the following proposals: (1) democratic politics founded on open discussions among political leaders, (2) employment of talented people from all over the country, (3) the promotion and encouragement of industry among the

common people, (4) the improvement of flood control projects and infrastructure, (5) the foundation of a navy, and (6) the commencement of foreign trade by the government.

His policies founded on the idea of “Three Dynasties” changed during his life, but its basic elements, namely self discipline of leaders and benevolent rule, continued to be at the core of his thinking since his thirties.

Keywords : Yokoi Shōnan, *Sandai* (“Three Dynasties”), *Kaikoku zushi*

キーワード : 横井小楠, 三代, 『海国図志』

はじめに

江戸末期の天保14年（1843）以来、肥後藩士横井小楠とその同志は、肥後藩家老、長岡監物の屋敷に頻繁に集まり、『近思録』（朱熹、呂祖謙編）を会読した。会読は語句の解釈に止まらず、藩政や幕政に及んだ。これがいわゆる実学党の始まりである。小楠はその精神的中心であった。

当時30代半ばであった横井小楠は儒教の伝統的理想である三代の理念を意識的に提唱し、肥後藩で実現しようとした。小楠の三代理念は儒教の修己治人の考え方を受け継ぎ、自己修養、仁政（王道）をその基軸とし、根本的には仁によって基礎づけられていた。小楠によれば、政治の目標は、国家の利害を第一に考える秦や漢の「功利」の政治ではなく、夏、殷、周三代における、民を安んじる政治でなければならない。古代中国の夏、殷、周の政治を理想とする考え方は、『論語』、『孟子』その他の儒教の経典¹⁾に現れ、朱子学²⁾も継承している。30代半ばの小楠の三代理念は、当時の日本でこのような儒教的理想の実現を目指すという宣言に近いものであった。

しかし、40代における、越前藩士との交流から得られた思想的刺激、中国で出版された世界地理書『海国図志』から受けた西洋文明の衝撃、50代始めに越前藩の殖産興業を支援した経験を経て、小楠の三代理念の内容は、スローガ的な色合いのものから、新しい体制の枠組みに耐えうるものへと大きく変化していった。

1) 金谷治訳注『論語』、岩波書店（岩波文庫）、2000年、316頁。金谷治訳『孟子』（新訂中国古典選第5巻）、朝日新聞社、1966年、145、153-154頁。竹内照夫訳注『礼記 上』（新釈漢文大系29）、明治書院、2010年、327頁。竹内照夫訳注『礼記 下』（新釈漢文大系29）、明治書院、1998年、768頁。

2) 朱熹、呂祖謙編『近思録』（『朱子全書』第13巻、上海古籍出版社、安徽教育出版社、2002年所収）、203、242、255頁。市川安司訳注『近思録』（新釈漢文大系37）、明治書院、217-219、413-414、486頁。朱熹『四書章句集注』（『朱子全書』第6巻、上海古籍出版社、安徽教育出版社、2002年所収）、13-14頁。

本稿では、小楠の三代理念を30代までと40代以降に分け、前期の三代理念、後期の三代理念と呼ぶことにする。従来の研究は後期の三代理念に集中し、前期の三代理念に触れたものは少なく、前期に三代理念の基本原則が成立したこともほとんど認識されてこなかった。筆者は拙稿³⁾において、前期の三代理念に関する野口宗親の研究を引き継ぎ、前期の三代理念の形成過程を詳述した。本稿ではまず、政策論と関係づけながら後期の三代理念の展開過程を描き、その上で小楠の三代理念について前期と後期の間で連続する要素と連続しない要素を明らかにしたい。

本稿は、小楠が30代半ばに唱えた三代理念を詳論した拙稿を前提としている。その内容は本論の中で立論に必要な限りで言及する。

本論に入る前に、後期の三代理念の研究史を概観しておこう。

源了圓は、論文「明治維新と実学思想」⁴⁾（1962）の中で、小楠の後期の三代理念が超歴史的な性格を持っており、後ろ向きの尚古主義ではなく、未来に開かれた実践的なものであると指摘している。

その後1970年代の前半に、松浦玲の論文及び著書、平石直昭の論文が現れ、研究者に大きな刺激を与えた。

松浦は1973年の論文⁵⁾の中で、江戸幕府は儒教を奨励しながらも体制の根本原理としてこなかったと述べ、幕府とは反対に日本を理想的な儒教国家にしようとした政治家として小楠を捉えた。1976年には、このような視点に立つ小楠の評伝が松浦によって刊行された。この評伝は、幕末の政治過程の中に小楠の政治的実践を位置づけたものである。後期の三代理念については、40代以降小楠が「堯舜三代」を強調したのは、朱子では西洋に対抗できず、「堯舜三代」に遡らざるを得なかったからであると述べられている⁶⁾。ここで松浦が三代に堯舜をつけているのは、小楠が40代の半ば以降、三代以前の神話的皇帝である堯や舜の事績を重んじ、元治元年（1864）や慶応元年（1865）に記録された対話録では、実際に「堯舜三代」⁷⁾という言葉を使っているからである。

3) 拙稿「横井小楠30代における「三代」理念の形成」、『大阪産業大学人文・社会科学論集』、第16号、2012年10月。本稿はこの論文の続編である。

4) 源了圓「明治維新と実学思想」（坂田吉雄編『明治維新史の問題点』所収）、未来社、1962年、76頁。

5) 松浦玲「文明の衝突と儒者の立場——日本における儒教的理想主義の終焉（三）」、『思想』、592号、1973年10月、60-63頁。

6) 松浦玲『横井小楠 儒教的正義とは何か（増補版）』、朝日新聞社（朝日選書）、2000年、42-43頁。

7) 山崎正董『横井小楠 遺稿篇』、明治書院、1938年、901、922、923頁。以下『遺稿篇』と略記する。「堯舜三代」という言葉は、小楠が私淑した熊沢蕃山も『集義和書』の中で使っている。熊沢蕃山『集義和書』（『日本思想大系 30 熊沢蕃山』、岩波書店、1971年所収）、280頁。

平石直昭は1974年に発表した論文の中で、後期の堯舜三代思想⁸⁾について、次のような点を指摘している。①聖人は努力せずとも自然に善を行っているが、それでもまだ足りないと自覚して道を実践しているという聖人観が示されていること、②聖人が天と同一化されずに、天の命を実践する主体とされていることにより、聖人の実体化が防止されていること、③朋友講学の考え方に基づいて学政一致を目指したこと、④小楠が理の概念を水平的、普遍的に捉え、儒教の道の下での人々の平等を基礎づけたこと、⑤三代の理念の根底に仁の思想があり、利他としての仁に基づいて交易を根拠づけたこと、⑥晩年において天の概念が「天帝」という形で人格神化したことなどを指摘した。

源了圓は2000年、自他の研究を集大成して、後期の三代理念の全体像を描き、朱子学との相違点を明らかにしようとした⁹⁾。源は、三代の学を、①思と格物、②仁と誠、③理、④天、以上4つの側面から考察し、このうち、特に物の効用を尽くして民生に役立つことを目指す格物と、人格神的要素の強い天が小楠の三代の学の核心であり、この2点において朱子学の枠を超えていると結論している。

2011年には野口宗親が『横井小楠漢詩文全釈』¹⁰⁾を刊行し、その漢詩篇で小楠の『小楠堂詩草』を解説した。この漢詩集には40代後半以降に詠まれた漢詩（「沼山閑居雜詩十首」を含む）が収められている。野口が後期の漢詩を詳細な注釈付きで訓読し、多くの漢詩の成立時期や典故が明らかにしたことは、後期の三代理念研究の大きな助けになっている。

以上のように研究史を概観すると、後期三代理念の思想的内容については、源と平石の詳細に渡る業績があることが分かる。源と平石の関心の多くは、後期の小楠と朱子学の思想的関係、あるいは小楠が朱子学から離脱したのかどうかに注がれている。二人の功績は、この観点から小楠のテキストを読み込み、聖人観、朋友講学論、理の概念、仁の思想、天の概念の人格神化、民生に役立つことを目指して物の効用を尽くそうとする格物論など、小楠の思想に関する重要な論点を多数指摘したことにある。

小楠は、特に30代後半から40代前半にかけての時期、陽明学を批判して、朱子学に沈潜し、朱子学を大いに評価した。しかし、小楠は私塾での講義録の中で、弟子に対して、「今朱子を学ばんと思ひなば朱子の学ぶ処如何んと思ふべし、左はなくして朱子の書に就とき

8) 平石直昭「主体・天理・天帝（二）——横井小楠の政治思想——」、『社会科学研究』東京大学社会科学研究所紀要、第25巻第6号、1974年、64-65、67-68、84、95、114、133-134頁。晩年小楠が天を強く意識していたことは確かだが、天の「人格神化」とまでいっていいかどうかについては疑問が残る。

9) 源了圓「横井小楠の「三代の学」における基本的概念の検討」、『国際基督教大学学報Ⅲ—A アジア文化研究別冊 伝統と近代化』、1990年、41-70頁。

10) 野口宗親『横井小楠漢詩文全釈』、熊本出版文化会館、2011年。以下『漢詩文全釈』と略記する。

は全く朱子の奴隷なり」¹¹⁾と、詞章にとらわれず、朱子が状況の中で何を学ぼうとしたか、何を考えたかを思うべきだと述べている¹²⁾。小楠は実践を重んじ、今自分が置かれた状況の中で如何にして三代の理念を実現するかを考えた。従って、朱子学か、陽明学か、朱子学から離れたかどうかというような学派に関する問いとは別に、儒教理念の実践者という視点から、小楠の三代理念はどのように展開されたか、さらにその理念はどのように政策論として具体化されたかという問いを立てることができる。このような見方は、三代理念について未来に開かれた実践性を強調する源了圓の論文（1962年）や、小楠を儒教的理想主義者と捉える松浦の評伝（1976年）の問題意識を受け継ぐものである。

本稿では、三代理念の実践者としての小楠という観点から、まず40代以降のテキストを分析して、三代理念が40代前半から晩年に至るまでの間にどのように展開したか、その理念に基づいてどのような政策が提案されていったかを跡付け、その上で前期の三代理念と後期の三代理念の連続性、非連続性の問題を取り上げる。

本稿の構成は次のようになる。まず、第1章では、30代に成立した三代理念に関する拙稿の結論をまとめた上で、40代前半の小楠の三代理念の内容および政策論との関係を考える。第2章では、安政2年（1855）47歳の年に行われた『海国図志』の講学が小楠の三代理念に与えた影響を、その講学の年および講学の2年後に詠まれた漢詩に探る。第3章では、『海国図志』を講学し、越前藩の経済政策に深く関与した経験に基づいて、小楠が万延元年（1860）52歳の年に口述した「国是三論」（越前藩の施政方針）における三代理念と政策論、両者の関係を明らかにする。第4章では、「国是三論」の口述以降明治2年（1869）に暗殺されるまでの三代理念の内容および政策論との関係を取り上げる。その上で結論において、それまでの論述をまとめながら、三代理念について前期から後期にかけて連続する要素は何であり、連続しない要素は何であるかを考察したい。

第1章 40代前半の三代理念

40代前半における小楠の三代理念の内容を見る前に、30代の三代理念とその時期の政策論を紹介しておこう。

小楠が30代に半ばに形成した三代理念は、自己修養、王道思想（仁政）をその基軸とし、

11) 『遺稿篇』、932頁。

12) 小楠は嘉永2年（1849）8月10日付の本庄一郎宛書簡で、朱子の書を読む際には朱子が「文義を転じ現在工夫の実」を示している处を見よと述べている。『遺稿篇』、128頁。小楠が私淑した熊沢蕃山も、朱子学、陽明学の学派にとらわれないと表明している。熊沢蕃山『集義和書』（『熊沢蕃山』日本思想大系30、岩波書店、1975年所収）、14-16、141頁。

根本的には仁によって基礎づけられていた。小楠は、功利の政治を批判し、民衆の生活を立ち行かせる仁政を強調した。

小楠が当時高く評価した人物は、日本では、毛利齊広^{なりとう}（第12代長州藩主）、上杉鷹山（第10代米沢藩主）という二人の大名である。二人は家族生活の中での修養から始めて民衆のための政治を目指したと評価されている。また、中国では三国時代の諸葛武侯（諸葛亮、字は孔明）が儒の道を学ぶ者の模範とされている。小楠によれば、諸葛孔明はもともと一生耕作に明け暮れる境涯にありながら、「時務」を弁えており、一旦劉備に迎えられると、絶えた漢室を再興し、大義を天下に明らかにした。前期において注目されるのは、小楠が三代の理念を唱えながら三代の聖賢に言及していないことである。

30代の政策論としては、肥後藩政の改革論である「時務策」（天保13年、1842）の草稿が残っている。その内容は、米価下落、藩による貨殖の政や課税などによって民衆が窮乏する現実を憂え、藩営の貸付制度や臨時課税の廃止、奢美の抑制、都市人口の抑制、商人の統制などにより、需要を抑制し物価を引き下げて「士民」の生活を成り立たせようとするものであった。

小楠は同志の肥後藩士とともに、藩政の改革を推進しようとした。しかし、藩の保守派の抵抗に会い、その一部は実現したものの、改革は全体としては失敗した。盟友の長岡監物は弘化4年（1847）に家老職を依願退任して失脚し、小楠や実学党の仲間は藩の主流派（学校党）から排斥された。

弟子を相手に朱子学の講学を続けていた小楠の許に、嘉永2年（1849）10月（小楠41歳）越前藩士の三寺三作がやってきた。三寺は越前藩主の松平春嶽から、諸藩を旅して「朱学純粹之儒者」¹³⁾を探すように命じられていた。このような旅の途上で、三寺は小楠の私塾を訪れたのである。

三寺は塾に約20日間滞在して小楠の講学に参加した。その間に三寺は小楠を尊敬するようになった。小楠は春嶽や越前藩士に読んでもらうため、それまでに書いた詩文や書簡の中から5点を選び、書写して三寺に預けた¹⁴⁾。

こうして小楠と越前藩士との交流が始まり、越前藩士が投げかける問いに答える中で小楠は思索を深めることができた。

当時、日本近海には外国船が出没し、那覇、長崎、浦賀に来航するものも現れた。諸藩の武士たちは危機感を募らせた。小楠も、対外戦争の危険が迫る中で、諸藩の武士たちの士気が上がらず、党派に分かれて争っていることを深く憂えていた。

13) 山崎正董『横井小楠 伝記篇』、明治書院、1938年、140頁。以下『伝記篇』と略記する。

14) この5点の原本は『機密録』と題して福井県立図書館松平文庫に所蔵されている。

天下の情勢と人物を知りたいと思った小楠は藩に願い出て、嘉永4年（1851）43歳の年、九州、中国、東海、北陸の20余藩を遊歴した¹⁵⁾。その途上、諸藩の藩士や知識人と面会し、旅先の民情を観察した。越前藩にも立ち寄り歓迎されている。

この遊歴の記録として「遊歴見聞書」が残されている。この見聞書には、小楠が岡山に立ち寄り、江戸時代初期の岡山藩主池田光政を「三代以上」¹⁶⁾の英君として称賛している箇所がある。その理由¹⁷⁾としては、光政が聡明で勇気をもって決断できること、表裏がないこと、規模が甚だ広大であること、臣下に対して「厳正」であること、「義理」に関して後難を恐れて妥協したりしないこと、いかなる風波險難に際しても動揺しないこと、朱子学を尊重し、朱子学者を呼んで「実行実見」¹⁸⁾を本として講学したこと、津田重次郎を登用して治水に尽力して成果を上げたことが挙げられている。小楠は岡山藩における朱子学の尊重に池田光政の遺風¹⁹⁾を見出している。

上国遊歴の翌年の嘉永5年（1852）、小楠は越前藩から藩校を設立すべきかどうかについて意見を求められ、その回答を「学校問答書」²⁰⁾と題して書き送った。「学校問答書」は藩校の設立の可否について、三代の理念に基づき、肥後藩校の時習館での経験と中国の歴史に照らして答えている。結論は藩主の心の修養が優先されるべきであり、藩校設立は時期尚早というものであった。小楠によれば、中国の皇帝が作った学校では、学生が互いに競争して対立し、党派争いが生まれて却って学校が政治の害になっている。そうならないためには、何より君主の一心がしっかりしている必要がある。

「学校問答書」によれば、夏、殷、周三代において道が行われているときには、君臣は互いに戒め合い、「非心」を正し合う関係にあり、この関係のあり方が政治万端に及んでいた。小楠は、このような君臣関係が、父子、兄弟、夫婦の間にも広がり、互いに善を勧め、過ちを救い、さらに天下政事の得失に及んでいる状態を、一家における理想的な講学の道とみなした。小楠によれば、このような「朋友講学」²¹⁾が行われていることが「学政一致」に他ならない。小楠は君主の心のあり方によって政治が大きく左右されると考えていた。従って家臣が君主の非心を正していくことが必要になるのである。

さらに小楠によれば、学校を創ったために党派争いが起きる逆説を避けるには、道を知っ

15) 『伝記篇』, 151-247頁。

16) 『遺稿篇』, 839頁。

17) 『遺稿篇』, 839-840頁

18) 『遺稿篇』, 840頁。

19) 嘉永5年（1852）3月25日付吉田悌蔵宛の書簡でも池田光政の文教政策が称揚されている。『遺稿篇』, 168頁。

20) 『遺稿篇』, 1-7頁。

21) 『遺稿篇』, 4頁。

ている明君が現れ、一家の内、さらには朝廷においても君臣間で講学を行い、このような朋友講学から「政事」が生まれてくることが重要である。従って、そのような明君でなければ学校を起こしてはならないことになる。

朋友講学は修己治人の考え方に則して言えば、己を修めるための方法であり、同時に人を治める際に適切な政策決定をするための方法でもあった。

朋友講学を重視する考え方は、小楠が熊本で熱心に行っていた、石高に大きな開きのある実学党の仲間との講学の経験が基礎になっていると考えられる。

小楠が結論として、越前藩での藩校創立を時期尚早と判断したのは、明言されてはいないが、藩主の春嶽がまだ明君の域に達していないと考えたからである。越前藩は結局小楠の進言に反して、安政2年（1855）に藩校明道館を創立した。

「学校問答書」によれば、君臣は講学の道においては対等の関係になる。小楠は天保14年（1843）35歳の年に書いた「恭題奉勝公和歌巻後」²²⁾のなかで、たとえ君主から無実の罪を着せられても怨まないなどと、君主に対する家臣の絶対的服従を強調していた。これに対して、「学校問答書」においては君と臣は朋友講学の道において対等になり、臣の立場は強められている。

「学校問答書」の中で、学校設立の可否は、『書経』に描かれている、君主と家臣が遠慮なく政策を巡って議論している堯や舜の時代の朝廷を本来のあり方²³⁾として論じられている。『書経』は後述するように40代後半から頻繁に言及されるようになるが、すでに40代の前半から提言の根拠として用いられている。

嘉永6年（1853）45歳の年の正月、小楠は「文武一途の説」²⁴⁾を著した。この文章は直接には知り合いの越前藩士に読んでもらうつもりで書かれたものである²⁵⁾。小楠はイギリス船が近年琉球に来航しているという情報を聞き、この年の夏に外国船が日本のどこかに来航するという流言を耳にしていた。「文武一途の説」は外国船の来航後、いずれ日本の世相が「武」一辺倒になり粗暴で「権変功利」に流れることを憂えて、「文」の重要性、つまり儒の道をおろそかにしてはならないと説いた文章である。

この文章の中で、小楠は文武を一致させている「聖賢」として、特に諸葛孔明と朱子を挙げている。小楠によれば、朱子は、その文章や事績から武事にも通暁していたことが分

22) 『遺稿篇』, 693-694頁。

23) 『遺稿篇』, 4頁。堯や舜の朝廷における君臣間の議論の様子は『書経』の中の「堯典」, 「皋陶謨」などで叙述されている。池田末利訳注『尚書』（全釈漢文大系11）, 集英社, 1980年, 62, 63, 72, 78, 79, 99, 110頁。

24) 『遺稿篇』, 8-10頁。

25) 『遺稿篇』, 211頁（安政元年3月14日付の越前藩士岡田準介への書簡）。

る。「豪傑にして聖賢にあらざる者あるも、いまだ聖賢にして豪傑にあらざる者あらざるなり」という朱子の言葉があるが、本当の儒者は英雄豪傑でもある。儒を学ぶ者は日本及び西洋の軍事に習熟した、時務を知る豪傑であらねばならないというのが「文武一途の説」の結論である。

この文章のなかで三代理念との関連で注目されるのは、冒頭において、三代の聖賢である、禹（夏）、湯王（殷）、湯王を助けた伊尹（殷）、文王（周）、武王（周）、周公（周）がいずれも英雄豪傑であり、武備にも尽力したと述べられている箇所である。30代までの小楠は三代の理念を唱えながらも、三代に属する聖賢にほとんど言及せず、むしろ三国時代の諸葛孔明や日本の毛利斉広（第12代長州藩主）や上杉鷹山（第10代米沢藩主）を模範にすべき人物とみなしていた。「文武一途の説」に至ってようやく三代の聖賢が登場している。

嘉永6年（1853）6月3日、アメリカのペリーが来航した。小楠は同年7月13日付の越前藩士吉田悌蔵（藩儒、名は篤、号は東篁）宛ての書簡の中で、ペリー来航について「江戸表英船参り散々之無礼相はたらき、深痛心之至に御座候」²⁶⁾と述べている。小楠には、アメリカ船をイギリス船と間違えた情報が伝わったようである。この書簡は、英船が来航するとの情報はすでにオランダより幕府に伝わっており、幕府も覚悟ができていたはずなのに、寝耳に水のような「大驚動」をしているは嘆かわしいと述べ、前水戸藩主の徳川斉昭が登用され、将軍から処置を任されて天下に号令することを期待している。

小楠はペリー来航後の嘉永6年（1853）8月15日、水戸藩の藤田東湖に書簡²⁷⁾を送り、今こそ前水戸藩主の徳川斉昭のもとに天下の列藩が結集して攘夷を行うべきであると述べ、肥後藩の有志で水戸藩に協力したいと申し出ている。

嘉永6年（1853）7月18日、プチャーチン率いるロシア船四隻が長崎に来航した。小楠は同年8月7日付の弟子に宛てた書状²⁸⁾の中で、ロシアが日本に助力を申し出ると予想して、ロシアに対してどのように応接するかが日本にとって非常に大事だと述べている。

嘉永6年（1853）の10月下旬、肥後藩の小楠、長岡監物、萩昌国（角兵衛）、柳川藩の立花壱岐、岡藩の小河一敏らは熊本で会合した²⁹⁾。彼らは幕府が川路聖謨、筒井政憲らを

26) 『遺稿篇』, 198頁。

27) 『遺稿篇』, 204-205頁。小楠は安政2年（1855）になって徳川斉昭が表向きは攘夷を唱えながら、幕府に対して講和もやむを得ないと述べていたことを知り、姑息な政治的智術を弄したとして斉昭とその家臣を批判し、さらに水戸学それ自体にも疑念を表明するようになった。『遺稿篇』, 220-222, 227-230頁。

28) 『遺稿篇』, 203頁。

29) 「夷虜応接大意」の執筆事情に関する本文の記述は宮川聖子の次の論文に依拠している。

「横井小楠「夷虜応接大意」の再検討」、『横井小楠と変革期思想研究』, 第6号, 2011年, 30頁。

露使応接係に任命して長崎に派遣するという知らせを得ていた。そこで川路に面会したところのある小楠が長崎に行って川路に会い、幕府がとるべき外交方針や応接の仕方を建言することになった。小楠は、長崎につてのある小河一敏を伴って長崎を訪問した。ロシア船は再来を期して出帆しており、川路はまだ到着していなかった。そこで小楠は急いで「夷虜応接大意」を書いて長崎奉行に託し³⁰⁾、長崎を後にした。

この献策³¹⁾は儒教の立場から幕府の外交方針を論じたものである。それによれば、日本は鎖国を国是とはしておらず、「有道」の国とは通信交易し、「無道」の国は拒絶してきた。日本はこれまでオランダや中国と交易してきたように、もともと世界に通用する「天地仁義の大道」に基づいて国を開いてきた。アメリカが6月の来航時の非礼を謝罪して国交を求めてきたら拒まないが、謝らずに兵事を行うようなら一戦に及ぶまでである。今ロシアと国交を結べば、日本は臆病になってロシアに助けを求めたということになる。従ってロシアには日本の事情をよく説明して長崎から引き取ってもらうべきである。

このように「夷虜応接大意」は、「天地仁義の大道」が日本の国是であるという前提に立って、幕府に対しては外交の指針を、幕府の応接係には外交交渉の論理を与えようとしたものであった。「夷虜応接大意」を読むと、小楠が単純な攘夷主義者でなく、相手国が礼を尽くしてきたら国交を結んでかまわないと考えていたことが分かる。小楠は水戸藩に攘夷の手助けをしたいと申し出ているが、それはアメリカが非道である限りの話であった。

小楠の「夷虜応接大意」と長岡監物が嘉永6年（1853）8月14日肥後藩主に差し出した建白書（「封事」³²⁾）を比較すると、人材の抜擢、特に徳川齊昭の登用が急務であるという結論に大きな違いはない。しかし、日本外交の原則については、監物が寛永の鎖国以来の幕府の伝統的な鎖国政策を前提としてその弾力的運用を主張しているのに対して、小楠は一見幕府の外交政策を引き継ぐような議論をしながらも、実際は儒教に基礎づけられた、全く新しい次元の原則を主張している。小楠の論理では、元々日本は開国していたことになる。

小楠は国際社会でも「天地仁義の大道」が妥当すると考えていた。天地仁義の大道とは、小楠が日本の国是とみなす「天地の心を体し、仁義を重んずる」³³⁾ことを簡略に表現した言葉であり、「夷虜応接大意」の中では、「天地自然の道理」³⁴⁾、「天地の大義」³⁵⁾「天地有生

30) 同論文、31頁。

31) 『遺稿篇』、11-14頁。

32) 侯爵細川家編纂所篇『改訂肥後国事史料 卷一』、1931年、171-176頁。

33) 『遺稿篇』、11頁。

34) 『遺稿篇』、13頁。

35) 『遺稿篇』、13頁。

の仁心」³⁶⁾とも言い換えられている。天地仁義の大道は、仁義が国際社会を含め天地万物を貫くという確信の上に使われている。この道に従って政治を行ったのが、堯舜であり、三代の聖賢であった。従って天地仁義の大道は三代の理念を別の表現で言い換えたものである。

小楠は慶応2年（1866）、洋行する二人の甥に対して、「堯舜孔子の道を明らかにして西洋機械の術を尽くす。何ぞ富国に止まらん。何ぞ強兵に止まらん。大義を四海に布くのみ」³⁷⁾という言葉を送っている。ここで大義は堯舜孔子の道を受けており、「夷虜応接大意」では、天地仁義の大道として表現されている。

30代半ばに成立した小楠の三代理念の基本である、自己修養と仁政（王道）の思想は40代以後も維持されている。40代前半小楠は越前藩士を相手に、三代以前の皇帝である堯や舜の事績や三代の聖賢の行動を模範としながら政治を論じるようになった。嘉永5年（1852）44歳の年に書かれた「学校問答書」では、『書経』で描かれた堯舜の朝廷のあり方に基づいて、藩校設立の可否が論じられている。「学校問答書」には、『書経』に登場する堯や舜、三代の聖賢の行動規範に従って、政治を論じる発想が明確に現れている。このような発想のあり方はその後も変わることなく続いている。45歳の年に書かれた「文武一途の説」でも、諸葛孔明や朱子とともに、禹や湯王など三代の聖賢が武事にも励んでいたと述べられている。このように40代前半から半ばにかけて書かれた文章の中で、堯や舜、三代の聖賢が具体的なイメージを伴って登場するようになる。40代後半にはこの傾向が加速してゆく。

三代の理念は国際社会においても妥当すると小楠は考えていた。「夷虜応接大意」はその立場から、幕府の外交政策の新しい原則を提唱したものである。

第2章 『海国図志』講学と「沼山閑居雑詩」

小楠は安政2年（1855）47歳の年、学問や政治路線の対立から、実学党の盟友であった長岡監物と絶交³⁸⁾し、同年5月熊本城下を離れて近郊の沼山津に転居し、私塾も移した。

安政2年（1855）の夏、小楠は弟子で蘭方医の内藤泰吉と、約3か月に渡って³⁹⁾、中国で出版された世界地理書『海国図志』（原漢文）を集中的に講学した。この世界地理書は、

36) 『遺稿篇』, 14頁。

37) 『遺稿篇』, 726頁。

38) 小楠と監物の絶交の日時や事情については、『伝記篇』, 313-316頁に依拠した。

39) 『遺稿篇』, 325頁。

世界各国の歴史や現在の人口、政治、経済、社会、軍事などの制度について、西洋の文献の翻訳を用いながら解説したものである。

小楠は『海国図志』を読んで未知の文明への理解を深め、大きな衝撃を受けた。その衝撃は、安政2年（1855）9月17日付の立花壱岐に宛てた書簡のなかで「…近比夷人の情実、種々吟味に及び候処、中々以前一ト通り考候とは雲泥の相違にて実に恐敷事に御座候。」⁴⁰⁾と吐露されている。この書簡は、西洋人は「遠大深謀之所存」をもっており、単に辺地を乱暴侵奪するような者ではなく、軍備の充実というようなことではこの事態に対応できず、為政者が心を改め人材の登用など抜本的な改革を行わなければならないと述べている。

小楠の三代理念は『海国図志』の講学により、具体的な政策の面で大きな変容を遂げた。本章では、小楠が『海国図志』に基づいて西洋文明をどのように捉え、どのような側面を高く評価したか、講学後、政策論がどのように変化したかを見てみたい。

安政2年（1855）の6、7月、小楠は「田中虎六為吾作四時軒記。賦七古一篇為謝。」⁴¹⁾（「田中虎六吾が為に四時軒記を作る。七古一篇を賦し謝と為す」）と題する詩を詠んだ。このなかで、西洋は「君聞かずや洋夷各国の治術明らかに、励精能く通ず上下の情。公に人才を撰び俊傑挙げられ、事有らば衆に詢り国論平らぐ。薄く税斂を征りて民貧しからず、厚く錢糧を貯えて勁兵を養うと。」⁴²⁾と描かれている。ここで西洋諸国の長所として挙げられているのは、上下の情がよく通じていること、選挙による俊傑の選抜、議会による国論形成、安い税金、強い軍隊である。

小楠が書き残したテキストの中で西洋に関するこのような記述は初めてである。この詩を詠んだ頃、小楠は『海国図志』を講学していたと考えられる。

小楠はこの詩の中で西洋の政治、経済制度を理想的なものとして把握している。しかし、だからといって三代の理念に対する小楠の確信がゆらいだわけではない。上記の詩の中で「然りと雖も君子の道豈に世を棄てんや、貴ぶ所は安民にして経済に在り」⁴³⁾と詠われている。安政3年（1856）12月21日付越前藩士の吉田悌蔵宛ての手紙では、藩主の松平春嶽について、「三代之象」⁴⁴⁾を養うように心がける必要があり、平常から『書経』を精読すれば、自然に堯舜の氣象が移るようになると述べている。

吉田宛の手紙と同じ日付で、小楠は越前藩士の村田氏寿にも手紙⁴⁵⁾を出している。それ

40) 『遺稿篇』, 224頁。

41) 『遺稿篇』, 879頁。『漢詩文全釈』, 169-174頁。

42) 『漢詩文全釈』, 171頁。

43) 『漢詩文全釈』, 170頁。

44) 『遺稿篇』, 239-240頁。

45) 『遺稿篇』, 241-245頁。

によれば、ペリー来航、安政2年（1855）の大地震と続く国難に際して、三代の道に達した「大経綸」のある君主と宰相が出なくては日本の落日を挽回することはできない。何より心配なのは、西洋ではキリスト教が国主から庶民にまで浸透して「政教一途」になり、天地間の知識が集大成されて学術が盛大になっているのに対して、日本に人心を一致せしめる治教がないことである。

小楠はこのように述べたあと、『海国図志』のロシア篇に触れ、その記述があいまいで分かりにくいといいながらも、国王が長期間少人数で国内を巡見して民情を視察していること、税金が十分の一であり、不足の分は鉱物資源や工業製品の交易による利益で補っていること、中国に派遣されたロシア人遊学生が『書経』、『詩経』、『論語』をロシア語に翻訳して、その修己治人、政教一致の教えがキリスト教に符合することに驚いたことなどを列挙している。小楠がロシア篇を、大きな興味をもって読んでいたことが分かる。国王の国内巡見、鉱物資源や工業製品の交易による財政補填などは、その後の小楠の詩や政策論に反映されている。

安政4年（1857）春、小楠は『海国図志』講学後の思索を、「沼山閑居雑詩」⁴⁶⁾と題する一連の詩に結晶させた。当初は十首からなるこの詩は、小楠が今日本の民衆の生活を安んじるには、堯と舜の道しかないということを宣言した点で重要である。

前述した、吉田悌蔵への書簡（安政3年12月21日付）では、堯と舜の氣象を身につけることが勧められているが、「沼山閑居雑詩」では西洋と関係づけながら、堯と舜のどのような事績を見習うべきかが説かれている。

まず、「沼山閑居雑詩」で描かれている西洋像を見てみよう。「沼山閑居雑詩」は最初10首あったが、何度も改訂されて最後の段階では7首にまで減っている。ここでは、もとの十首の配列順で論じることにする⁴⁷⁾。

第1首⁴⁸⁾では、堯が舜に帝位を禪譲したことが称賛され、天理に合わないという理由で「血統論」が否定されている⁴⁹⁾。第1首には、西洋は出て来ないが、アメリカの大統領制の知識が影響を与えている可能性がある。というのは、後に小楠が「国是三論」で、アメリカでワシントン以来、大統領職を世襲制にせず、「公共和平」⁵⁰⁾を以て務めとしていることについて、「三代の治教」に符合すると高く評価しているからである。

46) 『遺稿篇』, 880-881頁。『漢詩文全釈』, 180-198頁。

47) 『漢詩文全釈』, 180-181, 194-197頁。

48) 『漢詩文全釈』, 181-182頁。

49) 野口は、小楠が血統論を批判する際に念頭にあるのは將軍職の世襲であると述べている。筆者もこの見解を採っている。『漢詩文全釈』, 183頁。

50) 『遺稿篇』, 39-40頁。

第4首の最後の2句⁵¹⁾では、西洋が工業をうまく成り立たせて、国を富ませ、税金を薄くし、農民を苦しめることがないと詠っている。最初の6句は、舜の治政も同様に工業を育成して百貨が世の中に出回ったというものである。

また、第8首⁵²⁾は、西洋では上下がキリスト教を信奉し、人心に連帯できる処があり、治教が一致しているのに対して、日本ではそのようなものがなく、このままでは日本人がキリスト教に溺れ、西洋の奴隷になるのではないかという危惧の念を詠んだ詩である。

次に、小楠が堯と舜の事績のうち何を称賛したかをまとめると、皇帝の地位を禅譲したこと、天人の間の脈路がつながっていたこと、工業をうまく整えたこと、君臣間で朋友講学が行われていたこと、舜が天下を巡って万民の下情に通じたこと、以上になる。このような堯舜像は、小楠が『海国図志』で叙述された西洋文明に刺激されて、『書経』における神話的皇帝の事績を想起して表現されたものと考えられる。

「沼山閑居雑詩」は何よりも、今この日本において民を安んじるにはどうすればよいかという関心に貫かれていた。『海国図志』講学後、強調されるようになった要素は、夏、殷、周三代以前の伝説的皇帝である堯と舜の前述した事績である。このような堯、舜像を引きだしたものは、『海国図志』で描かれている西洋国家像であった。小楠は、この西洋国家像に照らされて浮かび上がった、古代中国の神話的皇帝像に基づいて、ペリー来航後の危機克服の方法と日本の針路を考えたことになる。こうした思想を漢詩の連作という形式で凝縮したのが、「沼山閑居雑詩」であった。

第3章 「国是三論」における三代理念と政策論

安政5年(1858)、越前藩主松平春嶽は小楠を越前藩校明道館の教授として招聘した。小楠が福井で携わったのは、藩校や宿舍での講学と、越前藩の殖産興業であった。

万延元年(1860)52歳の年、小楠は『海国図志』の講学や藩の経済政策に関与した経験を取り入れ、三代の理念に基づいて、越前藩の施政方針として「国是三論」を口述した。「国是三論」は広く世界、日本全体から越前藩を俯瞰して、越前藩の「国是」を定めようとしたものである。

「国是三論」は、富国、強兵、士道の3篇からなる。ここでは三代の理念がどのように政策論に反映されているかを見てみたい。

51) 『漢詩文全釈』, 186-187頁。

52) 『漢詩文全釈』, 190-192頁。

まず「富国」篇では、「天地の気運と万国の形勢」⁵³⁾に従って今や世界と交易すべきときであり、そのためには、藩が農民に無利子で錢穀を貸して生糸、麻、楮、漆などの物品の生産を奨励すること、藩がまずその生産方法を実験、改良してその技術を農民に伝えること、工業や商業も同様に錢穀を貸して奨励すべきこと、さらに、武士の次三男や一般の婦女も生業に就かせること、紙幣を発行して金融の融通をつけることが提案されている。

小楠によれば、このような殖産興業や交易はすでに古代中国において、交易、山、川、海の開発、治水という形で行われており、堯舜の治世も同じであった⁵⁴⁾。これに対して、幕府の政治は將軍家の繁栄を第一義とするもので徳川家の「便利私営」⁵⁵⁾であった。

「富国」篇はさらに、ワシントン以来のアメリカの政治、議会で民衆の意見を聞きながら行われるイギリスの政治、ロシアを初め欧米各国が民衆のために文武の学校、病院、幼稚園、聾啞院などを設立していることを称賛している。小楠によれば、西洋では政治が民衆のために行われており、ほとんど「三代の治教」⁵⁶⁾に符合する。日本は西洋を見習って、鎖国の旧見を捨て、交易の理を知り、幕府の「便利私営」を改めるべきである。さらに、中華主義の傲慢によってイギリスに何度も敗北して屈辱を受けている中国を他山の石としなければならない。

以上のように「富国」篇は三代の理念によって西洋の政治制度や経済政策を受け止め、幕府は私営の政を改めて、殖産興業に努めるべきであると批判している。反対に西洋の政治、経済制度は三代の治教に近いとしてほとんど手放しに賛美されている。

次に「強兵」⁵⁷⁾篇は、最初にイギリスの海軍と世界計略を叙述した上で、蒸気船の発明以来万国との距離が縮まり日本も海軍を起こさなければならないことを力説し、越前藩ではその準備として武士のうち航海に志あるものを集めて訓練しておく必要があるというものである。

小楠は「強兵」篇の中で、日本が軍制を一新して海軍を起こし、海外に渡航するようになれば世界の紛争を解決できるようになると述べて、海軍創設の目標を領土拡張ではなく世界の紛争解決に求めている。

最後の「士道」⁵⁸⁾篇は、武士が行っている今の文武の修業が、単なる技芸に陥り、修己治人の徳性を身につけるための修業という根本を忘れていると批判したものである。小楠

53) 『遺稿篇』, 32頁。

54) 『遺稿篇』, 38頁。

55) 『遺稿篇』, 39頁。

56) 『遺稿篇』, 40頁。

57) 『遺稿篇』, 41-49頁。

58) 『遺稿篇』, 49-56頁。

の士道論の眼目は、心を修めて「天地反覆の変乱に処しても一心静定士道を執て差錯」⁵⁹⁾なきようにすることが「本」であり、文武の技芸は「末」であって、技芸を磨くことが自己目的になってはならないというものである。士道篇では、文武の修業はあくまで修己治人の徳を養うためであること、文武の技芸の鍛錬は「末」であることが強調されている。小楠はここで儒教によって武士道を基礎づけ、修己治人の徳性を身に付けた武士の育成を提唱したのである。

士道篇の末尾は、治教はあくまでも三代を目当てとすべきであり、君主も臣下も文武の道が不可分であることを体認し、それぞれの職分に尽くすべきであると述べている。士道篇も民のための政治を要請する三代の理念に基礎づけられている。

以上のように、小楠の後期の三代理念は「国是三論」において、修己治人の修業に努める武士が三代理念に基づいて行い、民衆の平和で豊かな生活のための富国、強兵策として具体化されている。

第4章 晩年の三代理念と政策論

本章では、万延元年（1860）に「国是三論」を口述してから暗殺される明治2年（1869）1月までの最後の約9年間における小楠の言行に基づいて、この時期の三代理念の内容および政策論との関係を考察したい。特に重要なものは、小楠が文久2年（1862）に幕府に建白した「国是七条」、文久3年（1863）に越前藩で実行しようとした挙藩上洛論、元治元年（1864）3月の「海軍問答書」、同年秋の対談「沼山対話」、慶応元年（1865）の対談「沼山閑話」、慶応3年（1867）に松平春嶽に差し出した「国是十二条」である。

松平春嶽は安政5年（1858）の「安政の大獄」で隠居・謹慎の処分を受けた。この処分によって藩主ではなくなったが、事実上越前藩を指導していた。春嶽は文久2年（1863）7月小楠を江戸に呼び寄せて相談し、幕府による政事総裁職の内命を受諾して、政事総裁職に就いた。春嶽は小楠とともに幕政の改革を行おうとした。

小楠は早速幕府に「国是七条」⁶⁰⁾を建言した。これは、①将軍が上洛して朝廷にこれまでの無礼をわびること、②参勤交代をやめ諸大名を短期間江戸に参府させ、情勢を幕府に報告させること、③諸大名の妻子を領地に返すこと、④外様譜代に関わらず賢人を選んで幕府の役職につけること、⑤大いに言路を開いて天下とともに「公共の政」をなすこと、⑥海軍を興し、兵威を強くすること、⑦民間人同士の「相対交易」をやめて「官交易」に

59) 『遺稿篇』, 53頁。

60) 『遺稿篇』, 97-98頁。

すること、以上七条からなる。江戸幕府の伝統的政策を否定する改革案であった。

山崎正董によれば⁶¹⁾、小楠は当初、以上の七条の他に、「金銀銅座を廃し貨幣を公にす」、「天下金鉱を開く」の二条を入れていたが、幕府にすぐには執行できない事情があり、それを理由に建言の他の箇条までも妨害されては困ると考えて削除した。小楠には、金、銀、銅、鉄の鉱山開発によって海軍の費用をねん出する意図があった。2年後の元治元年(1864)3月には「海軍問答書」⁶²⁾が書かれ、勝海舟に送られた。これは海軍の莫大な費用が農民や商人の生活を圧迫しないように、特に銅山、鉄山の開発を提案している。小楠が民衆にできる限り負担をかけないようにして海軍を興そうとしたことが分かる。

小楠は春嶽を補佐して参勤交代制の緩和や海軍の創設などに取り組み、成果をおさめた。その間に幕臣の勝海舟や大久保一翁（忠寛）と親しくなった。脱藩浪士の坂本龍馬、長州藩の桂小五郎、周布政之助らと知り合ったのもこの時期である。

ところが、小楠は同年12月肥後藩士との飲食中、刺客に襲われた⁶³⁾。同席していた肥後藩士をそのままにして即座に避難したため、負傷はしなかった。しかし、肥後藩からその時の処置を厳しくとがめられそうな状況になった。春嶽は小楠が江戸においては危険と判断して、急遽福井に帰らせた。

翌文久3年（1864）2月、春嶽は公武合体の工作のために上洛したがうまくゆかず、同年3月下旬福井に帰った。

小楠は越前藩の同志とともに文久3年（1864）6月「挙藩上洛論」を主張して藩の保守派と対立した。挙藩上洛論は、春嶽とその養子で藩主の茂昭が藩兵4千名とともに上洛し、京都の攘夷派志士を一掃して政治的主導権を奪い、次の二つを実現しようとする策である。すなわち、①将軍、大名、諸大名臨席の上、日本代表と欧米代表からなる会議を開催して、開国か鎖国か、戦争か和平か、国の方針を決めさせること、②朝廷が国政を司り、賢明な諸侯に機務に当たらせ、全国より人材を集めて役人に選抜することである。

①は、幕府による、なし崩し的な開国を白紙に戻して、新たに日本の国是を決定しようとするものである。もしこの会議で開国と決まれば、長州藩も異存はない。小楠には、攘夷派の藩も納得させてできるだけ内乱を回避しようとする意図があった。

②は朝廷主導の政権を実現しようとするものである。小楠はこの時点で幕府の統治能力に見切りをつけていた。

61) 『伝記篇』、574-575、579頁。

62) 『遺稿篇』、24-27頁。小楠の銅山、鉄山開発論については、竹下八千子の詳細な研究がある。「横井小楠の銅鉄開鑿論」、『横井小楠と変革期思想研究』、第6号、2011年12月。

63) 『伝記篇』、674-693頁。

挙藩上洛論では三代という言葉は使われていない。しかし、攘夷派も説得してできるだけ内乱を回避しようとする姿勢は民衆の平和な生活の確保を為政者の義務とする三代理念の表れと言えよう。

越前藩では、小楠が言うように挙藩上洛するか、それとも藩主茂昭の江戸参府の義務を優先させて茂昭を江戸に行かせるかという論争が起きた。結局春嶽は後者の保守派の意見を採用して挙藩上洛は中止になり、挙藩上洛派藩士の多くは解職させられたり、他職に移されたりした。失脚した小楠は文久3年（1863）8月熊本に帰った。

熊本に帰った小楠は弟子との講学を続けた。文久3年（1863）2月には、江戸で刺客に襲われた時の処置に問題があったとして肥後藩の士席を剥奪された。

翌元治元年（1864）秋、時習館で居寮生として学んでいた井上毅（当時21歳）が小楠を訪ねてきた。井上はそのときの対談を「沼山対話」⁶⁴⁾として記録している。小楠はその対話のなかで「堯舜三代の道統」⁶⁵⁾という言葉を使い、孔子も孟子も堯舜三代の道統を租述したものであると述べている。

「沼山対話」によれば、西洋の「経綸窮理の学」は民生日用に大いに役立っており、その限りで聖人の作用を果たしている。聖人の作用とは『書経』の「皐陶謨」（正しくは「大禹謨」）の中で「六府三事りくふさんじまこと允をさに父をまり」⁶⁶⁾と書かれているように、聖人が「六府」をおさめて十分に利用し、物産を興し役に立つ道具を作って、多くの生業の道を創ったことである（ここで「六府」とは、民生日用のための物資として不可欠な、水、火、木、金、土、穀の六物⁶⁷⁾の集まるところを指す）。また「禹貢」⁶⁸⁾篇では、禹が交易の道を盛んにしたと述べられている。

これが小楠の言うところの聖人の作用である。小楠によれば、西洋はたしかに経綸窮理の学で聖人の用、「仁の用」を果たしているが、国家の利害ばかり考える「割拠見」⁶⁹⁾の気習に染まり、「仁の体」である「至誠惻怛そくたつ」（惻怛はいたみかなしむこと）の根本がない。ここで小楠は「国是三論」とは異なり、西洋の良い面だけを強調せず、その短所と思われる点も指摘している。

「沼山対話」以降の小楠の言行が分かる資料の中では、越前藩に差し出された「国是十二条」と元田永孚との対話録「沼山閑話」が重要である。

64) 『遺稿篇』, 897-913頁。

65) 『遺稿篇』, 901頁。

66) 『遺稿篇』, 903頁。前掲池田訳注『尚書』, 545頁。『漢詩文全釈』, 215-216頁。

67) 『国是三論』では「水・火・金・木・土・穀といへば山・川・海に地力・人力を加へ民用を利し人生を厚ふする自然の条理にして、堯舜の天下を治るも此他に出でず。」と述べられている。『遺稿篇』, 38頁。

68) 『遺稿篇』, 904頁。

69) 『遺稿篇』, 906頁。

まず、「国是十二条」は慶応3年（1867）に書かれたもので、そのテキストは2種類残っている⁷⁰。まず、慶応3年の1月11日の日付のあるものがある。これは一部の条に説明が付けられている。内容は、前藩主の松平春嶽や藩主の松平茂昭、藩の執政に対して、当時の情勢下で越前藩がどう行動すべきかを示したものである。もう一つは、この「国是十二条」に対する越前藩からの問い合わせに応じて、全条に解説を付けて書き直したものである。二つのテキストは内容的に大きな違いはない。ここでは後者の全条解説付のものを取り上げる。

十二条は、①天下の治乱に関わらず一国独立を以て本と為す、②天朝を尊び幕府を敬う、③風俗を正す、④賢才を挙げ、不肖を退く、⑤言路を開き、上下の情に通ず、⑥学校を興す、⑦士民をいつくしむ、⑧信賞必罰、⑨富国、⑩強兵、⑪列藩に親しむ、⑫外国と交わる、以上よりなる。

三代理念に直接関係する箇条を見てみよう。小楠は、⑥の解説で、「三代の道」⁷¹に基づいて西洋技芸を教える学校を開設し、「民を治めるに仁を以てする義」を講習討論すべきだと書き、⑦の解説では「仁政」という言葉を使い、⑨の解説では、仁愛心を以て「恒産」を与え、人々を豊かにすれば、「民死して怨まず」という富国の本が成り立つと述べている。小楠は「仁政」、「恒産」、「民死して怨まず」など『孟子』に出てくる言葉⁷²を多用しながら、越前藩が民衆のための政治を心がけなければならないことを強調している。

「国是十二条」には、④賢才を挙げること、⑤言路を開くことも含まれている。三代という言葉は使われていないが、これも堯舜三代の理念から導かれるものである。

次に、「沼山閑話」は、元田永孚が慶応元年（1865）の晩秋小楠を訪ねたときの対話を記録したものである。「堯舜三代」という言葉は「沼山閑話」⁷³でも使われている。

「沼山閑話」の中で、小楠は「宋儒」を批判⁷⁴している。宋儒とは、宋代の儒者、周濂溪、張横渠、程明道、程伊川、朱晦菴（朱子）らを指す。小楠によれば、「宋儒」は「天人一体」ということを理解しているものの、「天人現在の形体上に就て思惟」が欠落しており、格物についても「理をつめて見ての格物」であり、三代の経綸のように、「草木生殖を遂げて民生の用を達する様の格物」がないと批判する。それに対して、堯舜三代の時代には、「天帝の命を受けて天工を広むるの心得」、「現在天工を亮^{たす}くるの格物」があり、西洋のように

70) どちらも『遺稿篇』に掲載されている。『遺稿篇』、88-93頁。

71) 「国是十二条」の一部解説付きのテキストでは「唐虞三代の大道」という言葉が使われている。「唐虞」とは、堯の姓の「陶唐氏」、舜の姓の「有虞氏」に由来する。『遺稿篇』、89頁。

72) 『孟子』に由来する「仁政」、「恒産」、「民死して怨まず」という言葉の出典は下記の通りである。前掲金谷訳『孟子』、8、28、76、149、216頁。

73) 『遺稿篇』、922頁。

74) 『遺稿篇』、922-923頁。

民衆の生活のために「厚生利用」を図ろうとする工夫があった。小楠の批判を分かりやすく言えば、宋儒は形而上学に終始し、西洋の自然科学のように物質や生命の原理を追求して、それを民衆の実生活に役立てようとするところがなかったのに対して、堯舜三代にはそのような志向があったというのである。

「沼山閑話」では「天工を亮くる」というように天の働きが強く意識されている。万物に対する天の働きに対する小楠の意識はこれまでも漢詩のなかで表現されてきたものであるが、晩年にはこの意識が強まっている。

小楠は、いたずらに宋儒を批判するつもりはないと断りながらも、朱子学を含む宋学の観念的な「理」の説に対する懐疑の念を明らかにしている。このような懐疑の念は、西洋文明を学ぶ中で生まれたものである。

元田が「沼山閑話」を書いてから2年後の慶応3年（1867）10月、大政奉還が行われた。慶応3年（1867）12月には朝廷より小楠に召命があった。小楠は翌年4月再度の召命に応じて上洛し、新政府の参与になった。しかし、明治2年（1869）1月御所からの帰途、天皇に西洋思想を吹き込む危険人物として攘夷派の残党に暗殺された。

晩年の三代理念は、「国是三論」におけるそれと基本的には同じである。堯舜や三代の聖賢を模範とする堯舜三代の理念によって西洋文明が受容され、民衆のために物産を興し、交易を容易にし、多くの生業の道を創りだすことが、為政者の義務とされた。堯舜三代の理念は、「国是七条」や「国是十二条」に具体化され、幕府や越前藩に対して提案された。小楠の構想はその多くが新しい国家の枠組みとして使えるものであった。

「沼山対話」では、「国是三論」とは異なり、西洋文明の「功」だけでなく、その「罪」として、国家の利害ばかりを考える気習も指摘されている。堯舜三代の道統に対する小楠の信念は益々強まり、「沼山閑話」では、「天に事ふる職分」⁷⁵⁾が使命として意識され、宋学批判も行われている。

結論 一前期と後期の三代理念の連続性と非連続性

最後に、これまで論述してきた、後期の三代理念の展開過程および政策論との関係をまとめながら、前期と後期の三代理念の間で連続するものと連続しないものを考察したい。

小楠は30代半ば、自己修養、仁政（王道）を内容とする三代の理念を確立した。この理念は、国家それ自体のために富国強兵を追求する、秦や漢の功利政治ではなく、儒教の経典の中で盛時には聖王によって良い政治が行われたとされている夏、殷、周三代の政治を

75) 『遺稿篇』, 924頁。

理想として、今現在においてその実現を考えるべきだというものである。

小楠が30代半ばに三代理念を唱えたのは、当時の日本で仁政の実現を目指すことを宣言するためであった。三代理念はまだ多分にスローガンの的なものであった。30代の小楠が模範的人物として挙げたのは、江戸時代の毛利斉広と上杉鷹山、三国時代の諸葛孔明であり、夏、殷、周三代の人物は言及されていない。また、30代の三代理念の具体策として残っているのは、天保13年（1842）に起草された藩政改革論である。この改革論は藩営貸付制度や臨時課税の廃止、奢美の抑制、都市人口の削減、商人の統制などによって民衆の生活の存続を図ろうとするものであり、需要の抑制と物価下落を意図する農本主義的なものであった。

三代の理念は40代以降においても、自己修養、仁政という大原則に変化はなく、晩年まで主張されている。これが前期と後期で連続する要素である。

しかし、40代以降、三代理念の内容は大きく変容した。その契機は第一に、43歳の年に行った遊歴の途上、越前藩の武士や儒者と交流し、彼らの切実な問いに答える中で三代理念に関する小楠自身の理解が深化したこと、第二にペリー来航の2年後の安政2年（1855）『海国図志』を弟子と集中的に講学し、西洋文明に触れたことである。

まず、第一の契機から見てみよう。遊歴後に書かれた「学校問答書」や「文武一途の説」を読むと、『書経』に描かれている、三代以前の神話的な皇帝である堯や舜、および三代の聖賢の事績が、小楠の解釈を施されて新たに重んじられるようになったことが分かる。44歳の年に書かれた「学校問答書」においては、堯や舜の朝廷において皇帝と延臣たちが闊達に批判しあう場面が描かれ、「朋友講学」の意義が説かれている。その翌年の「文武一途の説」では、禹、湯王、伊尹、文王、武王、周公など三代に属する君臣がいずれも、武備にも努めたことが引き合いに出されて、「武」に偏る世相が批判されている。このように小楠は40代半ばに、堯や舜、三代の聖賢の事績に遡って、同時代の問題を考え、三代理念の内容として朋友講学や文武の一致も盛り込んだ。このような発想のあり方はその後にも変わっていない。

朋友講学や文武両面の実践という為政者の義務は、越前藩士や弟子との講学、小楠自身による兵学の学習やその成果である陸海軍論の提案などという形で実践された。

次に第2の契機について。嘉永6年（1853）年にペリーが来航した。当初小楠は来航時のアメリカの非礼に怒り、当初は、前水戸藩主の徳川斉昭に協力して攘夷を行おうとした。しかし、それはアメリカが非道である限りの話であった。小楠の考えは単純な攘夷主義ではなく、相手国が礼を尽くしてきたら国交を結んでかまわないというものであった。

小楠はアメリカの出方を見るうちに、アメリカが他国の沿岸を荒らしまわる乱暴狼藉の